

[特別活動]

支持的基盤の醸成とあたたかい学級集団づくり

-SSTとSGE指導プログラムにクラス会議を併用した効果について-

保坂 康恵*

1 問題と目的

中教審答申(平成20年)では、生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分であるという課題をあげている。そうした中で、小学校では子どもたちが1日の大半を担任と学級の友達と過ごし、とりわけ学級は、子どもたちが集団活動を通して社会性を身に付け、人間関係の在り方を学んでいくための重要な場となっている。

当校は山間部の小規模校である。児童は保育園から同じメンバーであり、リーダーになる子、リーダーを頼りにする子というように役割が固定化され、新しい人間関係を結ぼうとする意欲が低い。4月に新たに担任となった6年生での学級の課題は、2つあった。1つ目は、「ルールを見直すことなく過ごしてきたため一部の子ども意見に左右され、学級の一体感が感じられないこと」2つ目は、「自分の思いを言えるような信頼関係の形成がなされていないため、人間関係が階層化しており発言力の強い児童に自分を合わせようとしている児童が多いこと」であった。友だち関係が固定化し、なれあいが生じた故に安心できる友人関係が構築されていないと感じられた。そこで、ルール形成や気持ちのよい接し方を考えたり、ふれ合う集団体験を重ねたりする意図的な手だてを講じ、本音の交流ができる安心感と所属感のある仲間づくりの基盤を形成していく。さらに、安心感のある人間関係をベースに自分たちの悩みや学級の諸問題を自分たちで解決する方法を考え実行していく自治体験を積み重ねる。そうすることにより、学級肯定感を高め本音の交流を深めさせ、あたたかい学級集団づくりをしていきたいと考えた。

先行研究として、伊佐(2003)は、ソーシャル・スキル・トレーニング(以下SSTと略記)の段階的なスキル学習と般化を促す体験活動を組み合わせることでQ-Uテスト・学級満足度尺度における学級生活満足群の子どもを44%から86%に増加させた。また、岡沢(2008)は、SSTや構成的グループエンカウンター(以下SGEと略記)などのグループワークを意図的、計画的に行うことで児童の社会的スキル値を高め望ましい人間関係を築いていく上で効果的であることを明らかにした。しかし、児童の中には、社会的スキルが身に付きにくい児童や依然として満足度が低い児童も存在しているとした。一方、いわゆるスキルトレーニングとは別なアプローチで子どもの社会性に迫るものもある。赤坂(2002)は、児童が日常の諸問題を自分たちで助け合いながら解決していく民主的な話し合い活動であるクラス会議プログラムを実施することでコミュニケーションスキルの向上、集団への所属感や自己有能感を高める効果を明らかにした。これらのアプローチは、相互に補完するものではないだろうか。3者の先行研究から、SSTとSGE統合プログラムの取組、クラス会議プログラムの取組は、「コミュニケーション能力の向上」を図り、望ましい人間関係を構築していく上で非常に効果的であるといえる。それぞれの長所を組み合わせることでより一層効果が高まるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、前述のSST、SGE指導プログラムに、アドラー心理学に基づくクラス会議(以下クラス会議と略記)を併用する。これらの試行、評価、改善を行い、あたたかい学級づくりにより有効な指導モデルについて検証していく。SSTは、子どもたちが共に活動できるようになるために、ルールやマナーを明確にし模範を示しながら実際に練習して身に付けていくものである。SGEは、ふれあいと自己発見を目的とし、子どもの実態に合わせたエクササイズを構成して実施し、ふれあいのある本音の感情交流がある状態(以下リレーションと略記)を育てていく。SST、SGE指導プログラムを用い、安心して信頼できる仲間づくりの支持的基盤を醸成する。クラス会議では、学級肯定感を高めるために、自分たちでルールを守ったり身近な問題を解決したりする方法を探っていく。そして、以下の点を明らかにしていく。

- ・SST、SGE統合プログラムの一連の実践にクラス会議を導入することで、「学級肯定感」を高め、自己有能感をもちあたたかい学級集団をつくることができる。学級満足度にどのように影響するかを検討する。

* 上越市立安塚小学校

2 方法

生活目標と合わせソーシャルスキル教育（以下SSEと略記）年間指導計画を作成し、全校体制でSSEを実践する。6月、12月に学級の状態をQ-U調査し観察を加え実態把握を行う。それに即したSSTとSGEを意図的・計画的に実践し、これにクラス会議を併用する。また、協同活動を実践する場として学校行事や学級イベントと関連させて実践する。（表1）児童の変容は、Q-Uの数値で示すが、数値からは把握しきれない変容に関する情報を適宜、アンケートなどの児童の反応から見出していく。

表1 方法

全校児童 134名, 被験者: 小学校 6学年 男子12名, 女子12名, 計24名						
月	全校SSEとして4月「気持ちのよいあいさつ」① 5月「上手な話の聞き方」6~7月「あたたかい言葉かけ」①を実施し、それに関連づけながら学級でもSSTに取り組んだ。					
測定尺度	第1回 Q-Uテスト「学級生活満足度尺度」「ソーシャルスキル尺度」 2009, 6月9日					
実態把握	第1回 学級コンサルテーション会議 2009, 8月28日					
9 10 11 12 ①	実践	全校SSE	○SST ☆SGEなどのグループワーク	◎学校行事☆学級イベント	クラス会議 *議題	
		「気持ちのよいあいさつをしよう」② ・近づいて ・目を見て ・笑顔で ・聞こえる声	○気持ちのよいあいさつをしよう あいさつの意味づけをすることで、いつでも、どこでも、誰にでもできるようにする。 (配慮のスキル) 「いつでも」「どこでも」「だれにでも」 ☆ハッピーレターを送ろう 友だちのいい面に注目した温かい言葉かけをする機会を定期的に設定する。 ・2学期間、週に1回ずつ定期的に継続して実施。	◎やまびこ子ども祭り 「おたけ屋敷をしよう」 ・クラス一丸となって協力し、目標達成する活動	◎やまびこ子ども祭り 「ありがとうがんばったね!の会」 ・ふれあい班ごとに子ども祭りの頑張りを付箋に書いて認め合う活動	「日常の諸問題についてみんなで解決策を出し合おう」 ・2学期間、1週間に1時間ずつ定期的実施 ・協力して問題解決する態度を養う。 ・結果を予測して解決策を考える。 ・多角的に解決方法を出し合い、行動を選択しできることを体感する。 (赤坂(2002)クラス会議プログラムより) 「輪になって、いい気分・感謝・ほめ言葉」 ・自分や他者を受容する態度を養う。 ① 輪になる ② いい気分、感謝、ほめ言葉 ③ 全員に発言機会のある議題の話し合い 「伸ばそうコミュニケーションの力」 ・自己や他者を受容する態度を養う。 ・受容的な聞き方について理解する。 ・人を傷つけない話し方について理解する。 ・人を責めるより解決を重んじる態度を養う。
		「あたたかい言葉かけをしよう」 ふわふわ言葉を使おう ・友だちのよいところを見つけ、伝える。 ・自分のよいところに気付く。	○ふわふわ言葉を使おう 言葉の与える感情を知り、言葉を考えて使えるようにする。 (配慮のスキル) ○友だちを傷つけるのはやめよう ちくちく言葉の与える影響を考えて、ふわふわ言葉を使えるようにする。 (配慮のスキル) ☆先生ばかりが住んでいるマンション 友だちと楽しくエクササイズに挑戦しながら、意見や考えを出し合い、問題を解決したり協力したりできるようにする。	◎ふわふわ行動プロジェクト 縦割り班ごとにちょっとしたボランティア活動	☆安塚検定をしよう ・総合学習の一環として、安塚検定問題を作成し全校の皆に解いてもらう活動	「効果的な問題解決を!ブレインストーミング」 ・積極的で受容的な話し合いをする態度を養う ・解決に罰を用いない態度を育てる。 *給食の時、話をしてはいけない時に話している人がいる *遊び係が計画している遊びにたくさんの人が集まるには *副班長が班長に仕事を任せっきりで困っている *○○さんが○○さんを避けている *たまに休む○○さんに毎日手紙を届けなければいけないので困っている
		「あたたかい言葉かけと行動をしよう」② ふわふわ行動をしよう ・友だちのよいところを見つけ、伝える。 ・自分のよいところに気付く。	○ふわふわ行動をしよう 人をいい気分にする言葉や行動を考えて、実行できるようにする。 (配慮のスキル) ☆無人島SOS ☆人間コピー ☆バルントローリー 全員で1つのクラスであることを実感する。	☆お別れ会をしよう		
測定尺度	第2回 Q-Uテスト「学級生活満足度尺度」「ソーシャルスキル尺度」 2009, 12月4日					
実態把握	第2回 学級コンサルテーション会議 2009, 12月22日					
1 2 3 ②	実践	全校SSE	○SST ☆SGEなどのグループワーク	◎学校行事☆学級イベント	クラス会議 *議題	
		「気持ちのよいあいさつをしよう」③ ・近づいて ・目を見て ・笑顔で ・聞こえる声	○あいさつ 誰と・何人で・どんな (配慮のスキル) ☆ハッピーレターを送ろう 友だちのいい面に注目した温かい言葉かけをする機会を定期的に設定する。 ・2学期に引き続き3学期間、週に1回ずつ定期的に継続して実施。	◎ふわふわ行動パート2 ・ふれあい班ごとにちょっとしたボランティア ◎ウィンターフェスタ ・ふれあい班で力を合わせて参加する。	◎ウィンターフェスタ ありがとうがんばったね!の会 ・ふれあい班ごとにウィンターフェスタの頑張りを付箋に書いて認め合う活動	「日常の諸問題についてみんなで解決策を出し合おう」 ・3学期間、1週間に1回定期的実施 ・協力して問題解決する態度を養う。 ・結果を予測して解決策を考える。 ・多角的に解決方法を出し合い、行動を選択しできることを体感する。 ・実行して成果を確かめる。 (赤坂(2002)クラス会議プログラムより) 「輪になって、いい気分・感謝・ほめ言葉」 「伸ばそうコミュニケーションの力」 「効果的な問題解決を!ブレインストーミング」
		「あたたかい言葉かけと行動をしよう」③ ・友だちのよいところを見つけ、伝える。	☆漢字1文字を送ろう 友だちのことを考えて、ぴったり合う漢字1文字をプレゼントする。	☆ありがとうウィーク ・お家の方へ ・校舎へ・在校生へ ・先生方へ ・自分たちへ	◎6年生を送る会 感謝の気持ちを込めて「よさこいを踊ろう」	「効果的な問題解決を!ブレインストーミング」 *卒業式の歌について *感謝の気持ちを伝える「ありがとうウィーク」の企画運営について お家の方編・校舎編・在校生編・先生方編 *6年生を送る会の出し物について *3年生の大縄対決を受けるか?について *がんばった自分たちへの企画運営について
測定尺度	第3回 Q-Uテスト「学級生活満足度尺度」「ソーシャルスキル尺度」 2010, 3月18日					

3 結果の概要

(1) Q-Uアンケート調査（「学級生活満足度尺度」「ソーシャルスキル尺度」）から分かる学級の実態

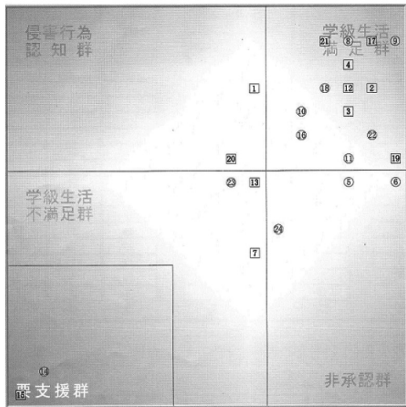


図1 学級満足度尺度 6月

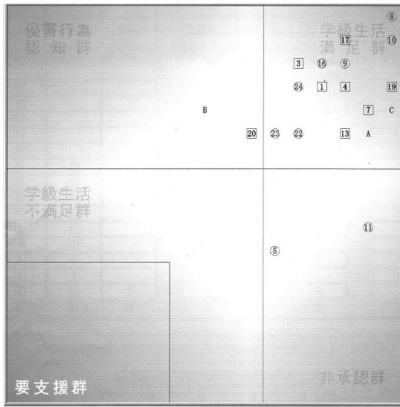


図2 学級満足度尺度 12月

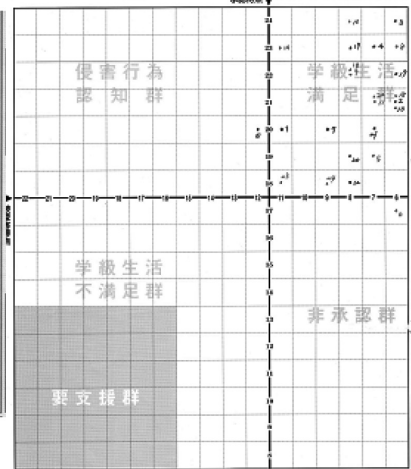


図3 学校満足度尺度 3月

表2 Q-Uアンケートにおける児童の各群の割合

	学級生活満足群	非承認群	侵害行為認知群	学校生活不満足群
6月9日	14人 (57%)	3人 (13%)	2人 (9%)	5人 (21%)
12月4日	19人 (79%)	2人 (9%)	3人 (12%)	0人 (0%)
3月18日	22人 (92%)	1人 (4%)	1人 (4%)	0人 (0%)

表3 Q-Uアンケートにおけるスキル値

	全国平均	学級平均 (6月)	学級平均 (12月)
配慮のスキル	27.3	27.2	28.3
かかわりのスキル	24.0	24.4	25.0

① 第1回Q-Uアンケート結果と学級コンサルテーション会議から

6月のQ-Uアンケート調査の結果（図1、表2の6月、表3の6月）を基に、校内で学級コンサルテーション会議を開き、実態把握と児童のねらう姿に向けて方策を考えた。6月のプロットは、河村のルールとリレーションの確立状態から見る学級分類ではリレーションが弱い「かたさのある学級集団」だった。スキル得点はやや低く、プロットの分布と観察から次のようなことが分かった。被侵害得点が全体的に低く、学級内に大きなトラブルは少ない。学級の行動規範は、ほとんどの子どもたちに共有されている。しかし、承認得点には差が見られ、学級内で認められ意欲的に活動できている子と、そうでない子がはっきり分かれている。一見、授業や係活動が整然と行われ、まとまった学級に見えるが、子どもたち同士の間関係の形成が弱いと考えられた。子ども同士の間で互いのよさを広く認め合う雰囲気がなく、友人関係も限定的になっており、互いの目を気にする傾向がある。子ども同士の関係にも距離があるように感じられ、シラッとした活気のない状態であり、学級活動も低調気味であった。この実態把握を基に、学級集団再生の大きな方針を、次のように立てた。

- ・ルールは、ほぼ確立し守られているので学習・生活ルールの再確認と日常化の徹底を図ること。
- ・教師と児童、児童同士のリレーションを形成し、一人一人の考えのよさを学級全体で共有できるような認め合いを行うこと。リレーション形成にあたっては、SGEなどのグループワークを意図的に取り入れ、学級肯定感を高めるために平行してクラス会議を定期的実施する。具体的方策としては、表1の実践①を実施した。

② 第2回Q-Uアンケート結果と学級コンサルテーション会議から

12月のQ-Uアンケート結果（図2、表2の12月、表3の12月）を受け、学級コンサルテーション会議を開き、6月のアンケート調査の結果と比較しながら実態把握と次に児童のねらう姿の確認と方策を考えた。河村のルールとリレーションの確立状態から見る学級分類では、ルールとリレーションの確立した「親和的な学級集団」に変化した。6月と比較すると、被侵害得点は更に低くなり、承認得点が全体的に高くなった。要支援群に分布していた2名の承認得点が大きく上がり侵害行為認知群に移動し学校生活不満足群がいなくなった。ほとんどの子どもたちが周りから認められていると感じており、安心できる場所となってきたと考えられる。児童同士の支え合い、学級全体に前向きに活動しようとする気持ちが高まったといえる。また、スキル得点も上昇している。SGEエクササイズの効果があったと考えられる。これらの学級の実態を踏まえ、更にあたたかく自分たちで問題解決ができ学級肯定感が高まる学級を目指し次のような方針を立てた。

- ・ルールの定着、リレーションも良好であるため、児童の主体性のある活動を見守る任意的な面の比重を高める。いろいろな活動を児童主体で計画・活動・振り返りをさせ、節目ごとによかった点、改善点を示し、子どもたちに話し合い

や認め合いを展開する。具体的には、表1の実践②を実施した。3学期のテーマを卒業に向けて「感謝」と設定し、誰にどのように感謝の気持ちを伝えるかを児童の話し合い（クラス会議）で活動を決め企画・運営を行い、実行後、子ども同士で相互評価するようにした。

③ 第3回Q-Uアンケート結果から

3月のQ-Uアンケート調査の結果（図3、表2の3月）から、河村のルールとリレーションの確立状態から見る学級分類では、12月と同様「親和的な学級集団」であった。学級生活満足群が79%（12月）から92%（3月）に上昇し、非承認群と侵害行為認知群の各1名も満足群の座標軸の至近に分布しており、ほぼ全員の児童が満足群であるといえる。12月からさらに児童同士の交流が進み、お互いを認め合うことで居心地のよい場所となっていると考えられる。6月に要支援群、12月に侵害行為認知群にいた児童の内1名は、満足群に移動した。学級の様子からも、児童は学校行事、学級イベントに意欲的に取り組む姿が見られた。表情も以前より柔らかくなった。個々の意見を出し建設的に話し合い、それを基に実行することができるようになった。行事やイベントを終えるごとに児童間の交流が深まったと感じた。また、嬉しいといった自分の感情を友だちに伝えるスキルも習得したと感じた。

(2) 「クラス会議」実施後の児童の主な感想の言葉から

図4のクラス会議実施後の児童の感想（抜粋）の記述から、学級集団への肯定感が高まっていることが分かる。困ったことを学級の皆で考え解決していくことで、議題を出した個人は、自分のことについて皆が一生懸命考えてくれ学級みんなに支えられている実感をもつことができる。また、友だちの問題を考える側は、友だちの役に立っていることを実感することができる。「議題に出ただけでも、解決すると思う。」という感想にはそれが表れている。個人の問題を学級全体で話し合い解決することは、互いが互いの役に立っている、友だちとつながっている感覚をもつことができ、あたたかい学級集団づくりに有効であると考えられる。

- ・ みんなで考えると1人では解決できないことが解決できるのですごいと思った。(複数回答)
- ・ みんなで意見を出して解決策を考えられてうれしかった。
- ・ 1人だと思いつかない解決方法もあってびっくりした。
- ・ クラスのことだからみんな必死に考えていていいと思った。
- ・ 提案者の立場になって考えられるようにしたい。
- ・ 議題に出ただけでも、解決すると思う。
- ・ やまびこ会議をして、みんなの気持ちがかかったと思う。
- ・ 1人で悩まないで議題に出してみようと思った。
- ・ きっとこのクラスならできると思う。
- ・ みんなでどしどし発言していたし、全力で話を聞いていて、さすがうちの6年は!と思った。

図4 クラス会議後の児童の感想（抜粋）

(3) 児童月のアンケートの結果から

毎月、月の終わりに実施している〈〇月の生活を振り返って〉のアンケートにおける「自分たちのクラスがかわってきている（よくなってきている。悪くなってきている）と感じることはありますか。感じたことがあったら、くわしく教えてください。」の質問への回答では、次のような変化と記述内容が見られた。（表4、図5）月を追うごとに肯定的回答が増え支持的基盤が育まれていることが分かる。クラスがよくなってきていると答えた児童は、4月9名（37.5%）、7月6名（25%）、12月と2月16名（66.7%）であり、悪くなったと答えた児童は12月、2月には1人もいなくなった。学級の児童の大半がよくなっていると実感しており、7割近い児童がよくなっていると答えている。また、6月のプロットで要支援群に位置し3月には満足群に移動したA児の記述（図6）に着目してみると、7月～10月は友達に対する否定的な記述であったが11月以降は、友達や学級に対して肯定的な記述に変化している。このような結果からも、一連の実践が有効であったことを示していると考えられる。

表4 児童毎月の生活を振り返ってのアンケート結果

	4月	7月	12月	2月
よくなってきている	37.5% (9人)	25% (6人)	66.7% (16人)	66.7% (16人)
悪くなってきている	25% (6人)	8.3% (2人)	0% (0人)	0% (0人)
変わらない 特になし	37.5% (9人)	66.7% (16人)	33.3% (8人)	33.3% (8人)

- 7月：人のいやなことをたくさん言っている。
- 9月：特になし
- 10月：悪口などのいじめが少し出てきた気がする。
- 11月：悪口を言っている人を見なくなった。
- 12月：昔よりいごちのいいクラスになった気がする。
- 1月：悪口を言ったりする人が前より減った。
- 2月：ふわふわ行動をする人がたくさん増えた。

図6 6月のプロットで要支援群にいたA児の記述

月	「よくなってきている」と答えた主な内容
4月	・朝読書の時にさわいでいた人がいたけど静かになった。 ・リーダーとしてそれっぽくなってきた。 ・楽しいクラスになってきている。
7月	・忘れ物が減った。・仲よくなってきている。 ・朝のハイタッチあいさつからまとまってきているような気がする。
12月	・友達をさける人がいなくなった。・ふわふわ行動がよくなっている。 ・あいさつがよくなってきている。・返事をすぐするようになった。 ・みんなの仲がよくなってきている。・絆が深くなってきている。 ・前より自分から立候補するようになってきている。
2月	・悪口が減ってきている。・相手をもっと知ろうと思っている。 ・困っている人を助ける人がいる。・あいさつをきちんとしている。 ・ふわふわ言葉、ふわふわ行動をする人が増えた。 ・卒業式の歌の練習をがんばっている。・みんなで遊んでいる。

図5 児童毎月の生活を振り返ってアンケート「よくなってきている」と答えた主な内容

(4) 児童の1年を振り返っての作文から

3月の児童の「1年を振り返って」の作文では、次のような記述が見られた。(表5) クラス目標「みんなは1人のために 1人はみんなのために」にふれて記述している児童が75%、協力・団結・助け合い、自分たちでできると記述している児童も75%と高く、支持的基盤や自分たちの力でできるという自己有能感、学級肯定感が高まっていることが分かる。

表5 1年を振り返っての主な作文記述内容と割合

児童の作文に見られた主な記述内容	割合
クラス目標「みんなは1人のために 1人はみんなのために」に近づいた・到達している・達成している	75% (18人)
協力・団結・助け合いができるようになった・自分たちでできる	75% (18人)
あいさつができるようになった・あいさつがよくなった	70.8% (17人)
ふわふわ言葉・ふわふわ行動ができるようになった	54.2% (13人)
困っていることをやまびこ会議で解決できるようになった	50% (12人)

〈K児の1年を振り返っての作文より〉

この1年間でこのクラスは、みんなで協力できるようになったと思います。最初は、あまり団結できなかったけど、最近はみんなで活動に取り組んでいると思います。だからこれからもそれを続けていきたいです。クラス目標には、もう到達しているんじゃないかと思います。特に絆の深いクラスの目標は、1番できていると思います。1、2学期にあったいじめっぽいものももうなくなったと思います。この1年間でこのクラスはすごくよくなったと思います。リーダーシップも発揮できるし、自分たちで企画運営もできるようになりました。今のクラス目標達成率が100%だとしたら、この先中学校で120%、130%ぐらいいけるようにがんばりたいです。

〈M児の1年を振り返っての作文より〉

私は、1学期の初めごろは、クラス目標なんて本当にうまくいか分らないと思っていました。だけど今では、とても大切だし達成できるものだと思えるようになりました。みんなも最初は不安でいっぱいだったろうと思いますが、もうみんな自信がついて中学校でもがんばるぞ!という人がたくさんいます。このクラスには、みんなをしっかりとめられるように努力する人や相手のことを考え、思いやりをもって行動する人、目標に向かって協力し合う人などがとても増えました。先生方にもほめてもらえることがたくさんあって、とてもうれしかったし自信ができました。中学校でもこの1年を忘れずに過ごしていきたいなと思いました。

4 考察と今後の課題

(1) 実践の成果

学期ごとに学級集団の状態を見ながら、全校SSEをベースとしたSSTでルールやマナーを身に付け、SGEで児童相互のリレーションを育むグループワークを意図的に取り入れ、信頼できる仲間づくりの支持的基盤を醸成する。それと平行してクラス会議を実践することは、児童の「学級肯定感」を高め、居心地のよいあたたかい学級集団づくりに相乗効果があった。Q-Uテスト・学級満足度尺度における学級生活満足群の子どもを57%から92%に上昇させ、要支援群、学校生活不満足群がいなくなったことから、あたたかい学級づくりに有効であるといえる。その成果の要因として、以下のように考えている。

① ルールとリレーション形成のためのSSTとSGEの実践と日常化により児童相互の認め合える支持的基盤を醸成した。

Q-Uテスト・学級満足度尺度における学級生活満足群の子どもが35%上昇し、要支援群、学級生活不満足群が0%に変化したことやアンケート結果から、ルールとリレーションを確立するための一連の実践が有効であったと考えられる。全校SSEとSSTの実践により、友達とのかかわり方、かかわる際のルール、集団生活を送るためのルール、みんなで活動する際のルールが学級内に共有され定着していったものと思われる。具体的には、「あいさつ」「返事」「あたたかい言葉かけ」「話の聞き方」「拍手」などのスキルを「いつでも」「どこでも」「だれにでも」を合言葉に日常的に実践できるように教師の声かけや帰りの会で意識化を図り般化に努めた。SGEをはじめとするグループワークを実態に合わせて実施することでふれあいが促進され、子ども同士の間仲間意識が生まれ、学校行事や学級活動を協力的に活発に運営することができるようになった。休み時間や給食などの日常生活も楽しいものになり、学級の一体感が感じられた。ルールが定着すると子どもたちは安心して友達とかかわることができるようになり、本音の交流も促進することができた。また、教師や仲間からの肯定的なフィードバックを通して、認められているという安心感をもつことができるようになった。したがって、そうした活動や働きかけを学校生活のあらゆる場面で意識的に継続していくことが、安心し信頼できる仲間づくりの基盤を形成すると考えられる。

② クラス会議の定期的な併用により学級肯定感が高まった。

SSTで上手な話の聴き方や責めない言い方などのルールを定着させ、SGEで互いを認め合う活動を行い相互尊重の雰囲気育てる。その上でクラス会議を積み重ねていった。子どもたちは、議題に出された問題を話し合う過程を通して、問題への対処法、問題への態度、罰を使わず相手にいやな思いをさせないで解決していく方法について学んでいった。解決策には選択肢があることや、自分たちには諸問題を解決できる力があることを体感し、自己決定する力、自己有能感を高めることができた。児童の感想の言葉にも表れていたが、クラス会議を重ねるにつれ、子どもたちの言

動、活動に大きく変化が表れた。なかなか発言できなかつた子が自分の意見を言えるようになったこと、学級の雰囲気が変わったこと、学級生活に受け身だった児童が学級のために動く、学級のことを考えるという感覚で活動していきようになったことなどである。「きっとこのクラスならできる」というような自分の学級を肯定的に、自信をもって見ることができるようになった。

③ クラス会議を活用した学級イベント・学校行事の企画・運営で協同活動を成し遂げる充実感をもつことができた。

方法の実践①②に示したが、児童会行事の子ども祭りや6年生を送る会などの出店や出し物を、学級みんなでやりたいことのイベント活動として取り組んだ。企画にあたっては、クラス会議を開き話し合い活動で全員の思いを引き出し、全員で分担した作業で協力して実施した。特に、10月の子ども祭りの出店「お化け屋敷」では、協力してつくりあげ、ひとつのことを成し遂げ喜びを分かち合う姿が見られた。学校行事に学級全体で取り組む活動を通して、協同活動を成し遂げた大きな充実感の体験を積み重ね、自信をもつことができた。まとまるよさを学んだ子どもたちは、3学期の感謝を伝える様々な活動でも、自分たちで考え協力して活動する姿が見られた。このような姿から、実生活の課題を試行錯誤しながら学んでいく活動を積み重ねることで、学級の子どもたち一人ひとりが所属感をもち、学級の一員としてよりよくしていくために積極的に参加していこうという気持ちをクラス会議を通して学び、自信と充実感をもつことができた。

④ 定期的な学級コンサルテーション会議の開催での実態把握と方策の検討により実効性のある実践ができた。

Q-U調査に観察を加えた学級コンサルテーション会議を定期的に関き、複数の目で学級の実態と児童のねらう姿を明確にし、方策を検討し実践することができた。児童の実態を的確に捉えながら小刻みに軌道修正し、実践したことが効果を発揮したと考える。

⑤ 学校全体での取組の効果

「あたたかい学級集団づくり」の取組は、学級単独ではなく全学年で取り組み、全ての学年でQ-U調査結果(表6)から、向上的変容が見られた。学校全体に元気なあいさつが飛び交い、あたたかい雰囲気に変化した。学級コンサルテーション会議を定期的に関き、

表6 Q-Uアンケートにおける全校児童の各群の割合

	6月		12月		比較	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
学級生活満足群	62人	46%	94人	70%	+32人	+24%
非承認群	20人	16%	19人	14%	-1人	-2%
侵害行為認知群	19人	14%	8人	6%	-11人	-8%
学校生活不満足群	32人	24%	13人	10%	-19人	-14%

複数の教師の目でQ-U調査に観察を加えた学級の実態把握を行い、それを基にした方策を立て実践した。学級単独ではなく、全校体制で学級づくりを考え実践したことの効果である。全校SSEの取組「あたたかい言葉がけ～ふわふわ言葉をつかおう～」 「いつでも」 「どこでも」 「だれにでも」を合言葉に、返事やあいさつ、話の聞き方、拍手のスキルなどを学級の実態に合わせて実践した成果である。

(2) 今後の課題

SST, SGE統合プログラムの一連の実践にクラス会議を導入することで、「学級肯定感」を高め、自己有能感をもちあたたかい学級集団づくりに効果があったと感じている。しかし、個々の実践が子どもたちのどの変容に効果的であったかまで詳細に分析することができなかつた。今後は、こうした観点からの検討も必要である。児童の中には、非承認群、侵害行為認知群に分布する児童が2名いる。個別で対応することも視野に入れ、更に成長できる学級集団づくりをしていきたい。また、Q-Uテストを児童の実態把握の一助とし、学級コンサルテーション会議を開き、そこに観察を加え複数の目で方策を考え実践することで学級満足度が高まる。あたたかい学級集団づくりのためには、忙しい学校事情に配慮しながらも、担任教師がアレンジしながら再現可能な望ましい学級集団を育む有効な手だてを検討するための定期的な学級コンサルテーション会議の時間設定が必要条件となる。

引用参考文献

- 1) 赤坂真二 「先生のためのアドラー心理学」 ほんの森出版 2010
- 2) 赤坂真二 「アドラー心理学に基づくクラス会議の効果の研究」上越教育大学修士論文 未公開, 2002
- 3) 伊佐貢一 「小学校におけるソーシャルスキル教育プログラムの開発」上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究第13集』2003
- 4) 岡沢雅子 「学級におけるよりよい人間関係づくりを目指した取組」上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究第18集』2008, 163~168pp
- 5) 河村茂雄 「育てるカウンセリングシリーズ2 グループ体験によるタイプ別!学級育成プログラム小学校編」図書文化, 2001
- 6) 河村茂雄, 藤村一夫, 浅川早苗 編著 「ブレ思春期対策「満足型学級」育成の12ヶ月学級づくり」小学校高学年 図書文化出版 2009
- 7) 森重祐二, 諸富祥彦 監修 「クラス会議で学級は変わる!」 明治図書出版 2010